

2024年4月7日

主題「自分の目から梁を取り除く」

ルカの福音書 6:39-42

序

今回はイースターで、その前の週は、休暇をいただいていたので、このルカの福音書の講解から少し間があきました。新しい方もおられるので、少し説明させていただきますと、私は昨年4月にこの軽井沢キリスト教会に赴任して、それからルカの福音書の講解説教をしています。少しずつ読み進めていますので、今は6章から学んでいますが、今日も共に、御言葉に耳と心を開いていきたいと思えます。

1. 盲人のたとえと弟子と師のたとえ

さて、今日の箇所にあるたとえは、39節でイエスが「彼らに一つのたとえを話された」とあるように、「一つのこと」をたとえを通して語られています。それは、端的に言うならば、「弟子としての生き方」という一つのことをいくつものたとえを用いて語られている、といえます。この「弟子としての生き方」について39-49節が一つのまとまりになっているので、この箇所を3回に分けて見ていきたいと願っています。今日の箇所は、そのうちの最初になるわけですが、この箇所は「盲人のたとえ」、「弟子と師のたとえ」、「ちりと梁のたとえ」の三つからなります。それでは「盲人のたとえ」から見ていきましょう。39節をご覧ください。

イエスはまた、彼らに一つのたとえを話された。「盲人が盲人を案内できるでしょうか。二人とも穴に落ち込まないでしょうか。」

このたとえは、非常にわかりやすいたとえであると思えます。目の見えない人が、目の見えない人を案内することができるだろうか。もし、そのようなことがあれば、案内した人も、案内された人も、二人とも穴に落ちてしまう、というもの。続けて40節でこのように語られます。

弟子は師以上の者ではありません。しかし、だれでも十分に訓練を受ければ、自分の師のようにはなります。

このたとえを聞いて、弟子が師以上になることも時にはあるんじゃないか？と思うかもしれませんが。

しかし当時の弟子がどのように学んだか考えると、当時は、本も簡単に手に入らないような時代ですから、師匠のもとで教えを請い、師匠について行きながら、その言葉や行動、まさに背中を見て学んでいったわけです。ですから、師以上の教材はなかったと言えます。そういう意味で、弟子は師以上の者ではない、といているわけです。そう語りながらも、「しかし」とイエスは続けます。

しかし、だれでも十分に訓練を受ければ、自分の師のようにはなります

十分に訓練さえ受ければ、自分の師のようにはなれるんだ、と言うんです。この「訓練を受ける」というのは、「整える」とか「完成させる」という意味ももつことばです。ですから、だれでも先生について完全に訓練を受けるのであれば、先生と同じようになれる、といているわけです。また同時にここからも、師のようになれても師を超えることはできない、といているのが分かります。そして三つ目のたとえではこのようにあります、41-42 節をご覧ください。

2. ちりと梁のたとえ

あなたは、兄弟の目にあるちりは見えるのに、自分自身の目にある梁には、なぜ気がつかないのですか。あなた自身、自分の目にある梁が見えていないのに、兄弟に対して『兄弟、あなたの目のちりを取り除かせてください』と、どうして言えるのですか。偽善者よ、まず自分の目から梁を取り除きなさい。そうすれば、兄弟の目のちりがはっきり見えるようになって、取り除くことができます。

この教えは聖書の中でも有名な教えの一つであると思います。あなたは兄弟の目にある小さなちりは見えるのに、自分自身の目にある梁、家の屋根や床を支える大きな木材にはどうして気付かないのか。自分の梁さえ見えていないんだったら、兄弟に対して、ちりを取り除かせて欲しい、なんて言えないだろう、とイエスは言っているわけです。そして自分の梁に気づかず人のちりにばかり目を向けている者を偽善者と呼び、まず「自分の目から梁を取り除く」ように教え、「そうすれば、兄弟の目のちりがはっきり見えるようになって、取り除くことができ」と自分自身に梁があることを認め、気づき、取り除くように教えているんです。非常にシンプルな教えであり、自己吟味について、教えておられることは明らかです。

結論 自分の目から梁を取り除く

今日みてきた、「盲人のたとえ」、「弟子と師のたとえ」、「ちりと梁のたとえ」。それぞれが何を言わんとしているかはなんとなくはわかると思います。

しかし、なぜイエスはこれらを「イエスの弟子」として生きていく上で重要なこととして教えているのだろうか、と疑問に思うわけです。イエスは何をここで伝えようとしたのか。これらのイエスのたとえをもう少し注意深くみていくと、ポイントになっている「ことば」に気がつきます。それは、「案内すること」、「訓練を受ければ」、「ちりを取り除くこと」。この三つのことばというのは、人を教える、人を導くことの言い換えのことばと言えるんです。つまり、人を教え、導く者が盲目、すなわち目的地も、道順も分からなくては案内できないし、教え導く者が現状に甘んじて学ぼうとしないなら、そのような師から訓練を受ける弟子はそれ以上成長することはできないし、教え導く者が、自分の罪に気付かず、自分は大丈夫だ、と傲慢な態度を取りながらも、他者の罪には敏感で、人をさばきながら生きるとしたら、兄弟たちを導くことなどできないのだ、ということです。

人を教えて、導くこと。言い換えるならば、弟子を作り、育てること。このように聞くと、大層なことに思えてくるわけです。人を教えたり、導くのは、牧師や教師の役目だから、今日の箇所は自分には直接関係のないことだったな...とそんなふうに思われる方がいるかもしれません。確かに、この箇所からも牧師や教師の責任は大変重いものであると言えるわけです。ですが、それ以外の人に関係ないのか、というところではないのです。マタイの福音書 28:18-20 でイエスご自身が私たちにこのように命じておられます。

イエスは近づいて来て、彼らにこう言われた。「わたしには天においても地においても、すべての権威が与えられています。ですから、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。父、子、聖霊の名において彼らにバプテスマを授け、わたしがあなたがたに命じておいた、すべてのことを守るように教えなさい。見よ。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいます。

あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。父、子、聖霊の名において彼らにバプテスマを授け、わたしがあなたがたに命じておいた、すべてのことを守るように教えなさい。

イエスは私たちに弟子を作るように言われているんです。しかも、ただ作ればいいのではない。弟子とする者にバプテスマ、洗礼を授け、イエスの教えのすべてを守るように教えることが命じられているのです。洗礼は按手を受けたものが授けますが、イエスを信じる私たちは、人を教えることは関係ないどころの話ではなく、教えなさい、と命じられているのです。だからこそ、私たちは今日のみことばを、自分自身に語られている主イエスの言葉として心に刻みたいんです。

「教え、導く者」としての自分、を考えていただきたい。自分自身を省みたいんです。それは、自分自身の目の中にある梁の存在を意識する、ということ。この梁は先ほども話しましたが、家の屋根や床を支える大きな木材のことです。目に入っているなんてあり得ない大きさ、例えば目のところに梁があったとしたら、何も見えないはずです。でも、私たちはこの梁に気づかないんだ、とイエスはおっしゃる。そのくらい自分自身が見えていない、見ないようにしている存在なんです。それなのに、人の目の中にある小さなちりにはよく気付く。そして、そのちりを見つけて、責めてしまう。自分の目にはちりよりも遥かにはるかに大きな梁があるのにも関わらずそのようにしてしまう。盲人のたとえも、師と弟子のたとえも、同じなんです。自分自身の状態を見ようとしなくて大丈夫、自分は大丈夫、と生きていくとき、罪人だということを忘れ、どれだけ大きな愛によって、イエスに救っていただいたかを忘れてしまう。

しかし、イエスは今日のたとえを用いて、私たちに気付くようにと、自分がどんな存在なのか見つめるように、促してくださる。自分がどれほど罪にまみれ、罪に支配されているのかを知らなくてはならない。そして、私の目に確かにあるこの梁を主にあって取り除いていただきたいんです。自分自身では取れない。気付くことさえできないから。だからこそ、「盲目な私を」、「主にある成長よりも現状に居座ることを良しとする私を」、「傲慢な私を」、イエスによって明らかにしていただき、この目の梁を取り除いてください、と祈り、願いたい。その上で主にある兄弟のちりに痛みながら、そのちりも取り除かれることを祈り、共に澄み切った目で、主イエスを見つめ、罪赦された者として従っていきたいのです。

人を教え、導く者とは、人より偉いとか信仰が強いとか、そういうことじゃないです。ただひたすらに主の赦しの中を生きていく、赦しに生かされている、そういう人のこと。

そうやって生きるために、私たちは主のしてくださったこと、主が私たちに与えられた福音を知り続けなければいけないんです。キリストの愛がどれほどのものか、一生をかけて味わい、問い続け、求め続けること。神のことばである聖書に何が書いてあるのか知ることを諦めないこと。このようにキリストの弟子として生きなさい、そして、教え、導く者でありなさい、とイエスは言われている。

教え、導く者とは、ただ兄弟の欠けを見つけ、指摘するのではない。そうではなく、キリストの愛によって赦された者として、私たちが受けたこのキリストの愛を知れるように案内し、神のことばによって罪が分かるようにともに訓練を受け、その罪をそのままにするのではなく、何度でも何度でも共にキリストの十字架の前に出て、赦しをいただく。

そのような歩み。それはさばくことではない。キリストに似た者へと一緒に成長していくということ。自らの梁に気付いた時、兄弟のちりを見つけた時、そこには痛みがある。しかし、その梁とちりのために、この梁に私が気付くずっと前に私たちの主は、十字架にかかってくださった。その愛に信頼する私たちに、赦しを与えてくださった。だからこそ、私たちはこの十字架の前に偽善者ではなく、自らを偽る者ではなく、キリストの愛に照らされ続ける罪人でありたい。そして、この愛に照らされながら、私たちに与えられているキリストの教会に共に仕えていきましょう。